
クレイモアと虚無を抱く仮面

D-NO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレイモアと虚無を抱く仮面

【Nコード】

N4342H

【作者名】

D-NO

【あらすじ】

北の戦乱から四年ほど。クレアはラキの手掛かりを探そうとユマト一緒にある村についた。そこでクレア達はある人物と出会う・・・この出会いが戦士たちに様々な影響をあたえる。

プロローグ（前書き）

どうも！D－NOです。ウルキオラを『クレイモア』の世界に飛ばしたらどうなるかなあゝ。と思って、『ブリーチ』と『クレイモア』をクロスしてみました。投稿は初めてなのでまだまだ至らないところがあるかも知れませんが、ご了承下さい。

因みに自分の解釈で皆さんのウルキオラのイメージと一致しない時があるかもしれません。それにウルキオラは変わっていくので、こんなのウルキオラじゃない！と思う人はご遠慮下さい。

それではどうぞ←←

プロローグ

ある真っ暗闇の空間で、ある1人の男が漂っていた。その男は、最早自由に動ける体ではない。そして男は、最後に出した質問に応えた。．．．ある女を思い浮かべていた。

――．．．．．〈怖くなんか、ないよ．．．．．か．．．．．あの女の言葉が酷く残るな．．．．．――

この男、ウルキオラはずっと言葉の意味を考えていた。

「悪い気分ではない．．．．．だが」

ウルキオラはどうしても分からなかった事があった。あの男、黒崎一護の．．．．．いや、たかが人間共の事が。

――．．．なぜ黒崎一護はあんなにまでなって戦うんだろうな．．．

? 何故、あそこまで恐怖を見せつけられても俺に立ち向かうのだ．．

．．．なぜ、人間はあそこまでなって．．．? 何故? ―

ウルキオラはそんなことが、頭の中で渦巻いていた。しかしウルキオラは、

「まあいい。既に終わったことだ．．．．．」

と言って、碧色の瞳をゆっくりと閉じた。

それでもウルキオラは、このやりきれない気分には悔やんでいた。

――．．．出来れば、この意味も分かりたかったな．．．．．――

するとウルキオラの体は、足元から砂のように消えてゆく．．．．

「出来れば．．．．．この俺にも．．．．．」

そしてウルキオラは”この世界”から消滅した。

この虚無からなる空間には、もう誰もいない。

．．．ある大陸の北の地

この北の地は殆どが雪に覆われており、吹雪が吹くなど日常的な場所である。今日はより一層吹雪いており、普通に進むだけでもつら

そうだ。

そんな悪天候の中で、平然と歩き続ける二人組がいた。二人組は互いにフード付きの足元まで届くマントを着ており、フードは深く被っているせいか、顔は影になっていて口元しか見えない。

そんな二人組だった。二人は縦に並んで歩き続けている。

後ろの者が前の者に付いて来ているようだった。

不意に後ろにいる者が、

「なあクレア、今日はどこを探すんだ？」

と話しかけた。

クレアと呼ばれた前にいる者はその問いに対し、淡々と応えた。

「今日はここよりも少し行った所にある村に行ってみようと思っている。そこの奴隷用の地下牢に、ラキの手掛かりがあるかもしれない」

どうやらこの者は何かを捜しているようだ。しかも声からして二人組は女だろう。

クレアの応えを聞くと、後ろにいる者は少し不安そうな感じで、

「クレア、流石にこの辺まで来ると覚醒者がいるかもしれない。強いヤツはいないと思うが・・・気よつけた方がいい」

するとクレアは、

「分かっているよユマ。いつも通り妖力も抑えてるし、目立った行動はしないさ」

ユマと呼ばれた女はそれを聞くと、ボソツと

「フッ、全くお前は…本当に世話がかかる」と小さく言う

「ん？なんか言ったか？」

「いや、何でもないよ」

「そうか…」

そんなたわいもない話し？を終え、二人は只黙々と歩き続ける。

…約三十分後

「ここだな…」

「その様だな」

そう言って二人はフードをとる。吹雪は既におさまっていて、小さな雪がクレアの頬を撫でる。その顔はとても整っており、なお且つ小顔だ。髪は金髪っぽいショートヘアーである。ユマの方は垂れ目で、ストレートのロングヘアーだ。10人中10人がこの二人を美人と思うだろう。

二人は今、村の入り口に立っていた…。いや、村の入り口”だった”場所に立っていた。その”村だった”場所を見るに耐えない惨状になっており、まるで巨人が暴れた後のような感じだった。かろうじて家らしい形を保っている方がまだましだろう。

「…とりあえず地下に続く扉を探そう。クレア」

「…ああ」

殆どが瓦礫と化して崩れているので、探し出すのはなかなか骨が折れるだろう。

そして二人は村の中を探し始める。

・・・数十分後

ザッ…

「ここにあったか」

今、二人の足元には、雪に少し埋もれながらも扉があった。

きつと地下へ続く扉だろう。その扉はずっと使われていないのかとても古ぼけていた。クレアはしゃがんで扉の取っ手に手をかけると、ゆっくり静かに開ける。やっぱり古かったのか、扉はギィイと音をたてて開く。そこには少し薄暗い、地下へと続く階段があった。クレアとユマは顔を合わせると、静かに階段を降り始めた。

その地下牢は古かった。だが地下牢としての機能は問題ない、堅牢な牢だった。牢の数は左右に5つ、計10部屋の造りだ。するとクレアは、その地下牢を一つ一つ念入りに確認し始めた。ユマは階段の所で立ち止まっている。

カッン：カッン、と石の床を歩く音だけが地下牢に響く。

そしてクレアが最後の牢の確認を終えると、残念そうな顔でユマの所に戻った。

するとユマは、

「何か手掛かりになりそうなものは見つかったか？」

と確認するように訪ねた。

クレアは牢からユマへ顔を向けると、

「いや、何もなかったよ…」

やはり残念そうだ

「そうか…」

しかしクレアの瞳はまだ諦めていなかった。

「…また今度、違う場所を探して見るしかない。」

その顔はとても真剣だ。クレアはそう言うのと、階段を登り始めた。

二人は登り終えると、雪は既にほとんど降っていない。するとユマはクレアに向かって、

「早く戻ろう。ミリア達を待たして迷惑をかける訳にはいかない」

「そうだな・・・早く戻るか」

二人はそう言って来た道に戻って行った。

しかし・・・

バツ！バツ！

二人は急に後ろに振り返り遠くを見つめる。顔はいつもと違って険しい表情になってる。そして二人は背中の手をかけると大きな両刃の大剣【クレイモア】を取り出した。そのクレイモアは女性が持つには大き過ぎる剣だ。しかし二人は何も苦もなくクレイモアを構える。

ユマは少し動揺した感じで、

「妖力だと？ここにいる事がバレたのか？」

クレアはユマの言葉に対し、

「いや、そんな筈はない。私たちは最小限まで抑えていた。気付か

れる訳がない」クレアとユマは冷静を保ちながら、妖力を感じた方に意識を集中させた。クレアは再び口を開けると、

「これは…覚醒者か？それも二体。強くはないようだが…そんなのが私たちに気付くか？」

「もしかして誰か戦っているんじゃないか？」

このユマの言葉にクレアは考える。

（だとしたら戦っている方の妖力も感じる筈…。まさかラファエラか！？しかしラファエラでも戦う時まで妖力を隠しきるなど不可能な筈…いったい何が？）

流石にクレアは混乱する。すると妖力が感じた方から碧色の光が見えた瞬間…

ドゴォーン！

「！！！」

爆発が起きたのではないかと思うほどの音が起きた。目を凝らしてみると、遠くの方で大量の雪が舞っていた。しかもその爆発が起きた瞬間、一体の妖力が消滅した。「なんだ？今は…？」

ユマは驚きを隠せない。クレアのその顔も驚いたような顔だ。

「今ので一体を倒したのか…？いったい何を？」

クレアはそう言うとしょこち考え込むように黙る。そして…。

「少し様子を見に行こう」

「！…本気で言っているのか？」

「ああ、どうやら誰かが戦っているらしいし、何よりさっきの爆発が気になる」

するとユマも少し考え…。

「ハア、分かったよ。あれは私も気になる」

「そうか…礼を言う」

ダッ！

クレアは礼を言うのと妖力を感じた方へ駆け出した。

ユマは最後に小さな声で、

「まったく、世話のかかる奴だ」

そう言ってクレアのあとに続いて駆け出す。

・・・このクレアの決断が……。後に思いもよらぬ出会いとなるなど、誰にも分からなかっただろう。

プロローグ（後書き）

読んでくださってありがとうございます！プロローグ如何だったでしょうか？あまりユマの事を知らないのです、ユマの方の性格がズレているんじゃないかと思えます（＾―＾；）

次はついにウルキオラが『クレイモア』世界に登場し活躍しまくっちゃいます。

それではお楽しみに。

EPISODE 1 (前書き)

どうも！DーNOです。次話投稿しました。ついにウルキオラが活躍します。初投稿したとき思ったのですが、ちよつとクレアとユマの性格が違ったかな？と思ってます。ちよつと後悔orz

EPISODE 1

真っ白の世界にある一人の男がいる。

男はそんな世界で寝ているかのように地面・・・いや雪の上に横たわっている。

そして男はついに、その眠りから目覚めようとしている。

・・・ウルキオラSide

———！？・・・俺は・・・？——

パチ・・・

———・・・雪？——

俺が周りの違和感を感じて目を開けてみれば、そこは真っ白な世界だった。周りを確認しようとして起き上がってみると、まず自分違和感に気付いた。

———！？・・・なんだこれは？…受肉している！？…
「…いたいという事だ？——

いきなりの異常性に俺は流石に動揺した。本来俺たちのカラダを構成しているのは霊子体のはず。なのに何故かこのカラダは霊子体ではなく、生きた人間の血肉で出来ている。

更に黒腔【ガルガンダ】への道を開こうとしたがどうしても開けない。
「…いたいという事だ。こんな事あり得ないはず」

そう、あり得ない筈。

俺は黒崎一護に負け、体は消滅した筈。

しかしカラダは受肉しており無傷。

虚圏【ウェコムンド】に戻ろうとしても出来ない。混乱状態でありながらも改めて自分の状態を再確認する。黒崎一護と戦って破けた服は元通りになっており、内臓も健在。腰には自分の斬魂刀、黒翼

大魔【ムルシエラゴ】が差しである。霊力も鋼皮【イエロ】もちやんとある。。そして周囲を見渡し、自分がいる場所を確認する。

ここは現世だ。今は冬なのか雪が降っている。

———現世のはずなんだが・・・不思議と息苦しくない・・・霊子が満ちているのか？——

馬鹿な・・・と内心で思う。現世でそのような場所があるなど聞いたことがない。それなのに何故？・・・。

「このカラダが現世で適しているのか？…だとしたら俺はいつたい…？」

様々な疑問が頭の中で渦巻く。

目を凝らして少し遠くを見れば、建物のようなものが霞んで見える。誰かいるかもしれない。そう思い探查回路【ペスキス】で辺りを探る。すると、

「!!?」

俺は今まで感じた事のない”力”に気づき後ろに振り返る。

振り返ってみるとこちらの方へ歩いて来る、みずぼらしい服を着た三人組がいた。三人は近くまでくると真ん中の1人が

「なんか旨そうな匂いがするから来てみれば・・・やっぱり人間か」そして右側のヤツが

「最近あまり美味しい内臓を喰ってなかったからなあ。残さず喰ってやるよ」

グヘヘヘへと、何とも醜い笑い顔で俺に向かって笑って来やがった。左側のヤツは

「ま、運が無かったと思って諦めな。でも少しは抵抗しろよ。そうしないとおつまねーからな」

———この屑共は力の差が分からないのか？コイツらから微弱に発せられている”力”よく解らんが…ドコにでもいそうな虚^{ホロウ}ぐらいだな——

そう当たりを付けていると、三人は”この”俺に向かって殺気を放ってきた。

愚かだな…。

シュッ！

俺は響転【ソニード】使って三人の後ろに移動し、気まぐれに真ん中の男を手刀で縦に真っ二つにした。

バシュッ！

と真っ二つに割れたクズは真っ赤な血を撒き散らして左右のクズ共にもたれ掛かった後、まえに向かって倒れた。その時間は短かったが、倒れるまでの間。俺には長く感じた。

「え？」

「なっ!？」

真ん中のクズが死んでやっその後ろにいる俺に気づきこちらに振り向いた。すると

ダッ！ダッ！

残りのクズ二人は一気に距離を置いた。顔は驚愕と恐怖でぬりかためられている。

…さぞかし驚いたんだろうな。醜い笑い顔を見せていた男は、

「て、てめえ！人間じゃなかったのかよ!?!? よくも!」

元々人間ではないのだが…。

もう一方の男は、

「キサマ！同族なのか!?!? いったいどういうことだ!?!」

—— — — — — 同族?… — —

ピキッ（怒）

これには流石に怒りを覚えた。

「貴様等クズと一緒にするなよ。虫酸が走る…。」

この一言で相手の怒りが頂点に達したのだろう。するとクズ共の”力”が急に膨れ上がった。

ボコ、ボコボコボコ

”力”が膨れ上がるのと同時にコイツらの体に変化する。

1人は筋肉がかなり盛り上がり、体も巨大化した。

もう1人も体が巨大化したが、こっちは体のいたるところに関節ができており、まるで昆虫のようだ。加えていろいろな突起物も生えた。

「――虚?・・・いや、仮面もないし孔もないな・・・じゃあここいつらはなんだ?――」

「てめえ、よくも。ぶっ殺してやる」

「……貴様らにできると思っているのか?」

「調子に乗りやがって、もういい。てめえの手足を潰してやって生きていることを後悔させてやる」

そう言う手を組み腕を振り上げる。

「フン」

遅いな。俺は肉達磨を指差し・・・

「虚閃【ゼロ】」

碧色の虚閃【ゼロ】を軽めに放つ。

そう軽めに放った筈なんだが・・・。ドゴォーン!!

ソレだけで肉達磨のクズは足首だけを残し、それ以外は消滅した。

「な、何だと!? ちっ、チックショー!!!」

昆虫のようなヤツは一矢報いようと巨大な爪を伸ばしてきた。だから・・・

ガキーン!

「!?!」

巨大な爪は見事におれの手のひらで止まっている。見た目と違ってあまり硬くないな・・・。しかし俺はそれよりも違う事を考えていた。

「――おかしい・・・加減はしたはずなんだが?・・・上手くコントロール出来ないのか?・・・それにとっても不安定だった・・・次から次へと積もる問題と困惑。頭を抱えてしまいそうだ。こんなヤミーだけの問題だけで十分だというに・・・。」

「く、クソ！」

昆虫のようなやつは更に連続で爪で攻撃を仕掛けてくる。俺はそれを弾いたり止めたりして防いだ。

——コントロールが出来ていないのはカラダが受肉したせいかな？それとも別の理由か・・・？——

俺が考え事をしてほおけている間に、昆虫のようなヤツは一目散に逃げ出した。

——逃げてる決断を誤ったな。最初から逃げていれば助かったかもしれないなかったのにな・・・——

「勿論逃がす気は全くないがな。とりあえずあのクズを半殺しにして・・・ここが何処なのか聞き出すか」

俺はそう言ってクズが逃げ出した建物の方へ歩き出した。

・・・クレアSide

「！！」村から出た瞬間。残った覚醒者がこちらに向かって来た。

私は直ぐにユマにアイコンタクトをかわすと村に戻って隠れ、妖力と息を最小限まで抑えた。ユマも同じように私とは少し離れて隠れている。

しばらくすると覚醒者が村に着いた。最初こちらに気付いたと思っただがどうやら違うらしい。息は酷く荒れていて、体は恐怖で震えている。

——逃げてきたのか？覚醒者狩りのヤツがしくって逃がしてしまったのか？——

しかし覚醒者にあれほど恐怖を与えるなど、それほどのヤツなのだろうか？　すると覚醒者は

「クソ！何なんだアイツは！一気に二体も倒しちまうなんて・・・しかもあんな技初めてみた・・・」ブルブル；

——二体？一体は妖力解放をする前に殺ったのか？・・・それにあんな技って、あの爆発の事か？——

謎は深くなるばかりだ。とりあえず息をひそめながら覚醒者の様子

を見る。

覚醒者は覚醒体のままで休み始めた。私は一瞬首を跳ねようかと迷っていたが・・・

ゾワッ！

「!!!？」

私は深淵者と会ったような殺気を感じ、そんな考えなどすぐに吹っ飛んだ・・・。

「ヒッ!!!？」

覚醒者もそれを感じ、体を飛び上がらせた。そして・・・

「見つけたぞ・・・」

シュタ・・・

余りに冷徹な・・・そんな空気を纏ったその男は現れた。

その男・・・——いや青年だろうか・・・——は見るからにかしな格好をしていた。

・・・背は170ぐらいだろう、真っ白の変な服を着ている。頭にも白い角のようなものがついた、頭の半分を隠すぐらいの妙な物を付けている。

顔はこちら側からは見えない。少し見える髪はここでは珍しく黒だった。腰には剣だろうか？細い剣を鞘に納めている。あんなものに立つのか？

今は崩れかけた壁に立っている。

しかし私はそれよりも・・・

——何故だ？ラファエラのように全く妖力を感じない？・・・いや本当にあいつには妖力はあるのか？それになんだ？体が重苦しい・・・——

すると覚醒者は、

「ヒッ、ヒィー!!!」

覚醒者とは思えない声を上げ、勢いよく後ずさった。
しかし青年は

「無駄だ．．．」

シュン

「!？」

「ナァ!？」

——消えた?!——

そう、消えたのだ。私たち半人半妖は、身体能力が上がって高速移動が出来るようになり、同時にそれがある程度は追える動体しかし私は全くそれを追えなかった．．．。

「どこ向いている?ここだぞ．．．」

青年は覚醒者の足元にいた。そして．．．

シュツ．．．

スパッ

あろうことか手刀で．．．それも素手で覚醒者の腰から下を切ってしまった。

「ギィヤァァー!!!」

覚醒者は悲痛な声を上げながら”腰から”落ちた。

「ウウウゝヴヴウウ．．．」

雪の上でうつ伏せになっている覚醒者の腕を、になっている覚醒者の腕を、肩から同じように手刀で切り落とす。更に色々な突起物も容赦なく切り落しす。覚醒体になる前の方がまだましだったろう姿になり。既に青年と同じ位の大きさになった。

これはまるで拷問だ．．．。

そして青年はガシ、と首を掴み体を起き上がらせる。するとこの青年は、

「オイ。このクズ．．．貴様に質問したい事がある。貴様等は”何だ?．．．．．” いったいここは何処だ? 答えろ」

ともう無力な覚醒者に訪ねた。——．．．．．は???

——

私はこの一言で更に謎が深まったような気がした．．．。

．．．ウルキオラSide

——ここか——

どうやら屑^{クズ}ここに身を潜めたいらしい。遠くから見たときは街か村かと思ったが…。

「最早ろくな所ではないな…」

きつと村だったのだろう。レンガ造りの家が全て破壊されている。本当に人が住んでいたのか疑う程だ。

——村人がいれば情報を整理する事が出来たのだが…。まあいい。どっちにしろクズに聞けばいい事だ——

俺は再び探査回路【ペスキス】で村の中を探る…。

——！…これは…思わぬ収穫だな——
探ってみると新たにふたつ、またもや自分が知らない”力”を見つけ出した。

「しかもこの俺が全力でさがしてやっと見つけ出せる程隠しきるとは…。後で炙り出すか…。」

そして俺は響転【ソニード】であのクズがいる所に移動する。

——あそこか。——

「見つけたぞ…。」

シュタ…。

俺はそう言って崩れている壁に着地しクズを見下ろす。

「ヒッ、ヒィー！！」

と無様な声をあげ、後ずさりをする。

「無駄だ…。」

俺はすぐさまソニードを使い、クズのすぐ横に移動した。

「ナァ！」

クズは未だに俺がいたところを見ている。

「どこ向いている？ここだぞ…。」

そして俺は手刀で腰から下を切り落とす。

「ギィァァァ！」

クズは悲痛な声と共に地面に落ちた。

「ウウウ、ヴウウウ・・・」

クズは腰から下を切られたのがかなりの苦痛だったのか、うつぶせになりながらも呻き始めた。

——腕はいらないな。それに余分なところも邪魔だな・・・——

俺は更に肩から下を切り落とす。そしてさまざまな突起物を切り落とした。このぐらいでいいか・・・。俺はそう思いクズの首を持ち上げた。

「オイ。このクズ・・・貴様に質問したい事がある。貴様等は”何だ？・・・”といったここは何処だ？・・・答えろ」

俺はこの質問、もとい拷問で更なる問題を抱えることになるなど思ってもみなかった。

EPISODE 1 (後書き)

そういえば、斬ぱく刀の（ぱく）の正しい漢字が出ないので（魂）
という漢字にしています。ご了承くださいm（　　）m
何かご指導ございましたら、ドンドンお願いします。
それでは次回の投稿をお楽しみ下さい。

EPISODE 2

それはとてもおかしい状況だった。

”明らかに” 人間にしか見えない者が、”明らかに” 化物にしか見えない者の手足を切り落とした。そしてその化物を死に際まで追いやっている。

そんな状況だった。

おっと、どちらも化物だったな。

・・・ウルキオラSide

今俺の目の前には死にかけの化物がいる。

俺はおかしな真似をすればすぐに殺せるように、霊力を手に集中させ、この屑クズに訪ねる。

「オイ。このクズ・・・ 貴様に質問したい事がある。貴様等は”何だ?・・・ いったいここは何処だ? 答えろ」

俺は脅すような口調で質問するとクズは不思議そうな表情になった。

「?・・・ キ、キサマ。いったい何をいつ

「俺の質問に応えろ。でなければ殺す」クッ!」

・・・ 沈黙が流れる。

そして沈黙に耐えきれなくなったのか、

「わ、わかった・・・。 応えるから殺さないでくれ・・・」
と胡散臭く言ってきた。

―― コイツ、応える気がないな――

仕方がなく腕を下ろし、ポケットに手を入れていつもの姿勢をとる。するとすぐさまクズの脚部と腕が再生した。

―― 再生力が高いのか――

そして勢い良く巨大な爪を振り上げると、

「ガァァ!」

俺に向かって爪を振りかざす。

「やはりな・・・」

最後の悪足掻きか？無駄な事を。

俺は腹に蹴りを入れる。

クズはそれだけで勢い良く吹き飛び、近くの瓦礫に突っ込む。

「グフ、・・・アガ、ガ・・・ガ」

やはりダメージが残っていたのかクズは、そこに仰向けに倒れ呻き上げていた。

「・・・使えんヤツだな・・・。仕方ない。別ヤツに聞き出せばいいか・・・」

「消えろ」

俺はクズに向かって腕を突き出し、

「虚閃【ゼロ】」

容赦なくゼロを放つ。

俺が思ったよりも凄まじい衝撃で辺りの雪が舞い上がった。俺はふとゼロを放った方の手を見ながら。

「・・・やはりな・・・コントロールがあまりできない。それに何だこの疲労感と・・・一瞬カラダが壊れそうになる痛みは？・・・舞い上がった雪がおさまると・・・」

化物は肉片も残さず消滅した。

俺は完全に消滅したのを確認し、

「さて・・・」

探査回路【ペスキス】を再び発動する。

そして隠れているヤツらがいる方に視線を向ける。

「・・・そこか。出てこい貴様ら・・・出なければ容赦はしないぞ」
「・・・」

「ちっ」

出てこないで虚弾【バラ】を壁に叩きつける。壁は、バゴン！と音をたて崩れ落ちる。そしてそこには、苦虫を噛み潰したような表情で睨み付ける人間の女がいた。

・・・クレイモアSide

碧色の閃光と共に凄まじい衝撃がくる。

「!?!」

舞い上がった雪がおさまり覚醒者の方へ目を向ければ、そこには肉片すら残っていなかった。

――あんなの見たことがない。少しの動作でかなりの攻撃力がある技を繰り出す。

悔しいがジーンの旋空剣が霞むでしもう程だ。あれはいったい・・・?――

私は目の前の光景に目が離せない。それにもう一つ気になることがあった。

――なんだ? ヤツが現れてから息苦しい・・・? 妖力を操る覚醒者とは”違う”これは、いったい?――

クレアは男の様子を窺い続ける。しかしそれを断ち切るように、

「・・・」。出てこい貴様ら・・・出なければ容赦はしないぞ」

「!?!?」

――なに!?!――

私はすぐさま壁を背に息を潜めた。

――バカな! 私たちに気づいただと!?!――

まさか(ドクン...) 気付かれとは(ドクン)・・・。

・・・

沈黙が流れる。

「ちっ」

男が舌打ちをすると・・・。

後ろの壁が急に崩れ落ちる。ユマが隠れていた方も同じく見つかってしまってる。

「くっ」

直ぐに振り返り男を睨み付ける。

見てみればその男は、なぜか驚愕の顔をしていた。

・・・ウルキオラSide

隠れていたヤツらを炙り出して見れば、そこにいたのは大剣【クレイモア】を構えた金髪の女たちだった。

「!？」

まさか女だったとは、少し驚きだ。まあいい。今はそれよりも…。

「答える。ここはどこだ？」

状況を確認しなくては。

するとショートヘアーの方の女はこちらを睨み付けながら聞き返してくる。

「お前、…くっ、いったい…“何”だ!!」

表情に少し困惑が混ざっている。それにどこか息苦しそうだ。

コイツ、まさか…。

俺は少しだけ霊圧をかける。すると、

「うっ!、く…?」

クレイモアを支えにしているが、胸を押さえ今にも倒れそうになる。――ほう、霊力が僅かながらもあるのか。だが近くにいただけで魂を潰れそうになる…。ゴミだな…。――

「クレア!?!どうした!」

もう1人の方はさっきと変わらず戦闘態勢の状態だ。こちらは霊力がないのか…。

「っ!…っ!…っ!…っ!…っ!…っ!…っ!…っ!…っ!…を?

「ここはどこだ?…!?!」

女に近づき今度は脅す程度に霊圧をかける。すでに跪くほど体を支えられなくなっている。

「ハァ!」

俺がショートヘアーの女に注目していると別の女が切り掛かってくる。すぐさまバックステップで避け距離をとる。

「どうしたんだクレア!？」

女は庇うように立ち、クレイモアをこちらに構える。

「分からない。何かに意識を潰されそうになって……。」

「妖力か？だが何も感じなかったぞ」

女たちの会話を聞くと、自分の聞き慣れない言葉が出てきた。――

――妖力……？俺が今まで感じてきた”力”はそれの事か？しかし”妖力”など聞いたことがない……――

妖力というのが分からないので確認しようとする。

「なんだその”妖力”とは？」

するとクレイモアを構えている女も確認するように訪ねる。

「なにを言っている。お前は”覚醒者”じゃないのか？」

またもや聞き慣れない言葉が出てくる。

……

一発触発の沈黙が流れる。

―――― どうやらいろいろと思い違いがあるようだな……

――

「仕方がない。お前たちを跪かせてからいろいろと聞き出すとしよう」

俺がそう言うと女が切り掛かってくる。すぐさま避け、すれ違い様に鳩尾に膝蹴りを入れる。

「がはっ！」

蹴った勢いで跪いている女の横に吹っ飛んだ。

「ユマ！くっそ……！」

それを見た女は苦しうでも立ち上がり剣を構える。

――俺の霊圧に当てられて立ち上がるとは。なかなかの気力だな……――

「ハア……ハア。ッ！」

この女は一気に距離を詰め、下段から切りかかる。段から切りかかる。

――脚力だけでここまで速いか・・・。――

俺はそれを左手の手の甲で弾く。それにしても・・・。

――コイツら・・・。何故妖力というものを使わない？――
何故か使わないのだ。最初に会ったクズ共は何かをする度にその力が感じられたのだが、この女たちはそれが全く感じない。つまり使っていないのだ。

「チッ！」

すぐさま構え直し胸に向かって突きを放つ。

「無駄だ」

俺はそれをわざと受ける。

「なっ!？」

斬撃は服を貫いたが鋼皮【イエロ】までは貫けなかった。

「くそ！」

女はさっきと同じ速さで距離をとる。すると女は俺の胸元に注目する。

「?・・・穴？」

俺はそう言われると首下辺りを触る。さっきの斬撃で胸元がはだけるようになっていた。

――さっきは確認してなかったが、やはり孔もあるのだな・・・。

――

そこには見事に貫通している”穴”があった。

開けられたような穴ではなく、元からそうであったような穴だ。

俺はそれを確認してポケットに手を入れいつもの姿勢をとる。すると、

「ぐっ、うう」

さつき蹴り飛ばした女が立ち上がり復歸した。

さっきので氣絶したと思ったのだが……。

——一面倒だな……——

響転【ソニード】を使い長髪の女の後ろに移動して手刀を入れた。

「ガっ……あ」

女は地面に倒れそうになるが、剣を突き立てなんとか意識を保つ。

「ユマ!!」

仲間を助けようとショートヘアーの女は

、俺を切るために駆けつけようとする。俺はそれを許さずソニードを使い首を掴むと近くの壁に、崩れるほど強く叩きつける。

「がはっ!」

俺は女の首を掴んだままままたま跪かせた。顔は殺氣立った目で睨み付けている。

——この目は……——

ふと黒崎一護の顔が思い浮かんだ。何故だ……。

ズキンと急に胸が痛む。

だか何故痛むのか分からなかった。

——コイツのこの目は……。あいつの、黒崎一護の時と同じ……

氣に食わない。思わず奥歯で齒軋りをしてしまう。

——わからない……——

「何故だ……」

——どうして諦めない?——

「っ?」

「何故なんだ!?!」

——どうしてなんだ!——

バツ!と長髪の女の方へ腕を上げ、靈力を込める。

すると徐々に碧色の靈力が人差し指に集まり初める。

「お前の仲間が死ねばその顔は絶望に染まるのか?」

「!ユマ!や、めろ・・・」

「・・・答えろ」

どンドン光が人差し指に集まっていく。
しかし、

「!?・・・ガっ!?!」

俺が血を吐くと腕に集まった霊力が飛散する。そして同時にカラダ中のいたる所に衝撃が走った。

――なんだ!これは!?カラダ・・・が、こわ、れる:――
俺はそこで意識が途切れてしまう。

・・・クレアSide

それはあまりにも絶望的な状況だった。ユマは首に入れられた手刀で今にも倒れてしまいそうになっている。

私は助けようとしてあの男に攻撃を仕掛けようとしたが、気づけば首を掴まれ壁に叩きつけられていた。

「がはっ!」

男が私の首を掴みながら見下ろしている。

――まずい、このままでは!――

まだ諦めるわけにはいかない。見下ろしてくる男を思いっきり睨み付ける。

私はこの絶望的な状況をどうにかしようと思いを巡らした。

――風切りはまだ完全ではない。高速剣を使うか・・・?しかし妖力を使うわけには・・・――

すると男の顔が怒りに染まったように歪む。何故だか私には分からなかった。

「何故だ・・・」

男はいきなりボソッと呟いた。

「っ？」

今なんて？

そして急に大きな声で怒鳴ってきた。

「何故なんだ!？」

男はそう言うと言マの方へ腕を上げる。すると人差し指に碧色の光が集まってきた。

———まさかあれは!——

私はそれを見て覚醒者を倒す時の光景が脳裏に浮かんだ。

男は覚醒者に言葉を言った時よりも冷徹な声で私に質問してきた。

「お前の仲間が死ねばその顔は絶望に染まるのか？」

「!ユマ!や、めろ……」

「答えろ」

くそ、もう高速剣を使うしかない。

そう思い、手に力を込めようとした。しかし……。

「!?!……ガッ!?!」

何故か血を吐き出し苦しみだした。首を締めていた手が一気に緩んだので、すぐさま後退し離れた。

ヤツの方を見てみれば、体を抱きしめるように苦しんでいる。

———なんだ急に?どうしたんだ?——

そして男はゆっくりと倒れた。

事の呆気なさに私は少しほおけてしまう。

ハッと思い、男の方を注意しながらユマに駆け寄る。

「ユマ、大丈夫か？」

ユマもあまりの呆気なさに少し戸惑っているようだった。しかしやはりあの男には注意していた。

「うう……だ、大丈夫だ」

そう言いつつ剣を支えにしながら立ち上がる。

ユマはヤツに注目しながら、

「どうしたんだ……いったい?何故いきなり苦しみだしたんだ？」

流石にこの状況は説明できない。

「分からない。」

私はヤツが何なのか思考する。

「ヤツは・・・もしかしたら組織が作り出した実験体か、何かかもしれない。」

とりあえずありうる事を言ってみた。

「組織が？しかしどう見ても男だぞ。」

それは私も疑問に思った。男の半人半妖はすぐに覚醒者になってしまいうため、もう作られていないはずだ。

――もしや私たちの生存がばれて粛清者として送ってきた使い捨てか？――

ふと思ったが、そもそも私たちがばれるようなことなどなかった筈だ。それに粛清者だとしてもおかしい。ヤツはここが何処なのかすら分かっていないようだった。

そんなヤツが誰かを探していたなどおかしい。

疑問が疑問を呼び、最初よりも余計に謎が深まってしまふ。

そして迷った末、

「・・・コイツを連れていこう・・・」

「！！何を言っている！本気か！？」

「ああ、連れて行く」

ユマはこちらの方は向き思いつき睨み付ける。

「正気だと思えないぞ。殺しといった方がいいんじゃないか？」

ユマが聞いてくるので私は理由を言った。

「ミリア達のところに連れて行ってタバサに調べてもらおう。組織の者なら何かしら情報が手にはいるし、覚醒者ならその場で殺せばいい。正直ヤツには分からないことが多すぎる・・・」

「・・・」

私の言葉にユマは考え込む。

「・・・」

「・・・分かったよ。今回は分からないことが多すぎる。戻ってき

ちゃんと整理しよう」

そしてユマはクレイモアをもちながら男の方へと近づく。

私もそれに続き男に近づく。

男に近づいて確認してみると、やはり完全に気絶していた。ふと首下の穴に注目する。

——さっきも思ったが何だこの穴は？——

ユマもこの穴が不思議に思ったのか、私に訪ねた。

「クレア、何だと思う？この穴・・・」しゃがんでみて穴を調べる。何かしらの怪我だと思ったが・・・。

「まるで元からあったような穴だ。こんなのがあつてよく生きられるな・・・」

私はそう言つて男を担ぐ。完全に気絶しているので特に気にしない。

「軽いな・・・」

肩に担いでみると驚くほど男は軽かった。

ミリア達のところに戻る帰り道、おさまっていた雪は再び強く吹雪いていた。

EPISODE 2 (後書き)

どうも。ちょっと間を置いて次話投稿しました。

急に倒れたウルキオラ。いったいどうしたのでしょうか？それは後々書いていこうと思っております。

次回は北の戦乱で生き残った戦士たちが出てきます。それではお楽しみにー(ハ－ハ)ノ～

EPISODE 3

パチ・・・パキッ・・・。

薄暗い広めの洞窟を中心ある焚き火が辺りを薄く照らしている。

その焚き火を中心に、七人の人物が取り囲んで座っていた。

全員は女性で黒い服に身を包み、それぞれ大剣【クレイモア】を背負っていた。

その中の長い癖毛を後ろでポニーテールにしている女性が、傍らの木片を取り焚き火に入れてある1人の女性に話し掛ける。

「あの男の様子はどうかタバサ？」

三つ編みを肩の前に出している、タバサと呼ばれた人物を見て尋ねる。

「まったく起きる気がしませんね・・・。本当に生きているのか疑うほどです」

タバサは応えるとさらに付け足した。

「この三日間で探ってみました・・・妖力のかけらもありませんね。ミリアさん、あの男は人間なのでは？」

タバサはミリアと呼ばれた女性に聞き返す。

「・・・」

だがミリアは応えずに考え込む。

しかしタバサの言葉に別の人物が否定の声を上げた。

垂れ目でストレートのロングヘアーの女性だ。

クレアと共にウルキオラと戦ったユマである。

「だが私とクレアが戦った限りではとても人間離れしてたぞ。覚醒者と・・・半人半妖の私たちを圧倒するほどに・・・」

そう、クレアとユマはウルキオラに殺されそうになるまで追い詰められたのだ。

そんな者が人間なわけがない。

ユマの言葉に続きクレアが静かに話しだす。

「タバサ。やはり妖力以外何も感じなかったのか？」

クレアはまるで確認するように尋ねる。

タバサはクレアの方に向き、報告するように応えた。

「クレアさんが始めに頼んだように妖力以外の”力”も探る為にいろいろやってみました。全く感じないです。クレアさんは今でも？」

クレアはそう訪ねられると洞窟の奥に視線を向け応えた。

「ああ、今でも感じる。前と同じ、とてもぼんやりとしたかんじだが・・・」

クレアがそこまで言うのとミリアが、後ろ髪を二つに束ねて前に持ってきている女性に話し掛ける。

「あの男の体の方はどうだった？シンシア？」

シンシアと呼ばれた女性は応えた。

「妖力の同調が出来ないですから外見上でしか診れませんが、怪我などはないです。でも何なんでしょうね。クレアさんだけが感じているものとは…。それに首下にある穴と、胸元にある『4』という数字とは？」

シンシアが調べると首下の穴の他に、服に隠れて『4』という数字を見つけたのだ。

首下の穴も謎だが、この数字も謎だった。

何かのナンバーというのわかるが、組織ではナンバーを体に付けるなど聞いたことがないのでこれも謎に包まれたままだ。

シンシアが話し終えると、髪型をボーイッシュのようになっている女性がクレアに向かって文句を言った。

「本当に・・・厄介なヤツをつれてきたな」

少し言葉に棘がある感じだった。

そしてそれに便乗するように、髪を真ん中に分けたショートヘアーの女性が、後ろで手を組みながらクレアに文句を言う。

「まったくだぜ。妖魔や覚醒者なら遠慮なしに殺れるんだが、そうじゃないんなら殺ろうにも殺れねーな」

二人に攻められクレアは申し訳なさそうだった。

「すまないデネブ、ヘレン。ここまで厄介なヤツだったとは思わなかった。」

この二人はデネブとヘレン。

髪型がボーイッシュな方がデネブで、髪を真ん中で分けたショートヘアーの女性がヘレンである。

パキッ……。と木片が軽く弾ける音が鳴り、洞窟に沈黙が流れた。

クレアとユマがウルキオラを連れてきてからもう三日たっている。

ウルキオラはまだ起きる気配が無い。

ミリアはあの男、ウルキオラがいったい何なのか未だに分からず困惑していた。

「……………」

ミリアは三日前の事を思い出す…。

・・・三日前

ミリア達は帰りが遅いクレアとユマを洞窟で待っていた。何時までも遅い二人に待ちくたびれたのかヘレンが文句を垂れる。

「ったく、おせーなあいつら……。まさか覚醒者に見つかったんじゃないねーだらうな」

ヘレンは少しイライラしていた。

それをなだめるようにデネブがヘレンに言う。

「あいつら二人でも流石に見つかるとような真似はしないだろ。大方、この吹雪でゆっくりと戻って来ているのだろう」

そう言って視線を洞窟の外に向ける。

外は暗い上に吹雪いているので、五メートル先も見えない。

しばらくするとタバサが急に顔を洞窟の外に向ける。

「!・・・戻って来ました」

そうタバサが言って少し待つと、入口の脇からマントを着たクレアとユマが出てきた。しかし、いたのはクレアとユマだけではなかった。

バツ! ミリアは急に立ち上がった。

「!?!? クレア・・・そいつは誰だ?」

ミリアはクレアの肩に担がれている人物を見て、冷静に訪ねた。

ミリアの言葉に他の全員が気付き立ち上がる。

『『『!?!?』』』』

するとクレアはミリアの問いに応えずに、無言で肩に担いでいる人物を地面に置いた。そうして一息つくともミリアの問いに応えた。

「分からない。ただ妖魔や覚醒者の類ではないと思うのだが・・・」
ミリア達はその人物を見て少し驚いた顔をした。

「・・・男の人間?」

ヘレンが言ったようにクレアが連れてきた者は男の人間のようにだった。

しかし見たことのない白い服装に、頭の半分を隠すように被っている、妙な物をつけた痩せた黒髪の男だった。

なぜか両眼の下に垂直に伸びる碧色の線がある。

「すまない。クレアがどうしてもと・・・」

ユマが申し訳なさそうに謝った。

「どうしてこんなヤツを連れてきた? 人助けのつもりか?」

ミリアは再びクレアに質問する。

しかしクレアは・・・

「・・・やはり只の人間だと思うのか・・・?」

と逆に聞き返した。

クレアの言葉にミリア達は怪訝そうな顔をした。

含みが入った質問をされれば当然だ。

そしてデネブがクレア達に質問した。

「どうということだ？」その質問にはユマが応えた。
ユマは一步前に出ると今までのことを説明した。

「実は・・・」

ユマが説明したものは信じがたいことだった。

自分たちが行った先でこの男と覚醒者が戦っているところに遭遇した。

そして男は覚醒者を圧倒して肉片も残さず倒し、その後に隠れていた自分たちを見つけ、あまつさえ殺されそうになったと言うのだ。
だが急に苦しみだしそのまま気絶したお陰で難を逃れたのだ。

ユマが説明が終わるとヘレンがクレア達に怒鳴った。

「ハア！？お前らそんな危険なヤツを連れてきたのかよ！明らかに人間じゃねーよコイツ！」

ヘレンが怒鳴るのも当然だ。

自分たちは身を隠さなければならない状況だ。だから、厄介ごとを持ち込まれるのは困るのだ。

するとタバサが不思議そうに男を見ながら皆に言う。

「ですがおかしいですね・・・そこまで強いのに妖力が全く感じません」

タバサはユマの説明を聞き妖力を探ってみた。
しかし全く感じない。

「！・・・タバサでも感じないのか？」

ミリアもユマの説明を聞きずっと妖力を探っていたのだ。

タバサとミリアの言葉にさらにクレアが付け足す。

「そうなんだ、コイツは戦っている時でさえ妖力が感じなかった。だが妖力とは違う、もっと別の”力”を感じた」

クレアの言葉にクレア以外の全員の頭の上に『？』が浮かぶ。さらにクレアは話しだす。

「コイツには分からないことが多すぎる。だからコイツには聞きたいことが沢山あるんだ」

クレアがそこまで言い終えるとシンシアがクレアに尋ねる。

「もしかして組織の者の可能性があるかもしれない、ということですか？」

シンシアの質問にクレアはかなり真剣そうに。

「・・・そういう事だ・・・」

クレア達の説明と答えを聞いたミリアは、厳しい表情で考え込む。そして、

「・・・いいだろう。コイツが組織の者なら尋問していろいろ聞き出す。もし覚醒者の類なら分かった時点で首をはねればいい」
するともちろん異議をたてる者がいた。

「いいのかよそんな訳が分からない危険なヤツをおいといて!!」
だがそれをミリアは説き伏せる。

「組織の者だったら今の組織の現状を知ることができる。それにコイツの正体を知る必要があるだろう」

するとヘレンはしぶしぶといった感じで、

「ミリア姉さんがそこまで言うなら仕方がねーか・・・」

ミリアの決定により、ウルキオラの処置は条件付きの保留になった。

「すまない」

クレアは礼を言うとうルキオラを肩に担ぎ上げ、洞窟の奥に連れて行く。

ミリアはそれを見送ると、シンシアとタバサに指示を出す。

「シンシアとタバサはあの男が目覚めるまで正体を探ってくれ」
ミリアの指示にシンシアとタバサは『はい』と言って了解した。
すぐにクレアは奥から戻ってきた。

ミリアの指示を聞いていたらしく、タバサに1つ言付けをした。

「さっきも言ったようにあの男からは別の”力”感じた。感知能力
が高いタバサにそれを探ってほしいのだが・・・」

「分かりました。あの男の正体は探るつもりでしたからもちろんで
す。ちなみにクレアさんは今でも？」

タバサが尋ねるとクレアは、

「ああ、ぼんやりとした感じだがな・・・」と応えた。

「そうですか・・・」

タバサはそう言って洞窟の奥へ行く。

シンシアもそれに続き洞窟の奥へ行く。

ミリアはタバサとシンシアに指示を出した後、自分が座っていた位
置に戻りクレアとユマに休養を促す。

「二人とも疲れただろう。休んでおけ」

ミリアの一言で他の者も元の位置に戻り座った。
こうして長かった1日が終わったのだ。

・・・現在

・・・クレアSide

パキッ・・・ピキッ・・・

また、この洞窟の沈黙の中で燃えた薪が弾ける音が鳴った。

あの男を連れてきてから既に三日が経っている。

奴はいったい、いつになったら目を覚ますのだろうか？

この三日間で新しく分かった事も進展も何1つない。

逆に謎が深まってしまった。

分かっているのは人間ではない、想像以上の化物だということ。

そして覚醒者ではないという確信と、胸元にある数字から何かの組織ではないかという疑惑・・・。

本当に連れてきてよかったのだろうか？

そんな後悔が頭の中でよぎる。

たがあの男の正体を知りたい。

いや、私は知らなければならぬ。

そんな気がする。

いろいろな思考がグルグルと頭の中で渦巻く。

――一少し・・・頭を冷やしてくるか――

これ以上煮詰めても仕方がないと思い、スッと立ち上がる。そして洞窟の外に歩き出す。

するとミリアがどうしたのかと思い尋ねてきた。

「どうしたクレア？」

私は振り返り、簡単に応えた。

「鍛錬をしてくる」

「・・・そうか、分かった」

ミリアは少し間を置き納得した感じで言葉を返した。

皆は私がよく鍛錬をしているのを知っているので特に気にとめない。
というより皆それぞれが自分の鍛錬をしていて珍しい事ではないの
だ。

今外はあまり吹雪いていない。

鍛錬をするのには問題ない、丁度いい天候だ。

私は大剣【クレイモア】が背中にあるのを確認し外へ行く。

・
・
・
・
・
・

皆がいる洞窟から少し離れたところ。

私は今針葉樹が広がる寒林地帯にいた。

その中の木が切り倒して広場のようになっている所に私はいる。

そこで私はひたすら剣を振り続ける。

ただただずっと右腕だけで振り続ける。

――まだまだ……。もつと速く、精密に……

妖力を使わずに、右腕の筋力だけで振り続ける。

正直きついと言ったらきついものだ。

だが泣き言は言ってられない。

「フゥ……」

ある程度剣を振り続け、一息つく。

――そろそろいいか――

そして剣を背中に帯刀する。

私は目を瞑り意識を集中させ、背中の剣を握る。

スゥ……とゆっくり目を開け右腕に力を込めた。

狙いは自分の周り。

そして……。

ドン！

という音と共に自分の足元の周りに積もっていた雪が吹き飛んだ。

剣は帯刀したままだ。

「くそ……まだ遅いな」

私はこの四年間、ずっとフローラの風斬りを練習している。

この風斬りは、妖力を使わずに身体能力と剣技だけで剣を抜き――

振る一く納めるといふ動作を高速で行う技だ。

つまり超高速の抜刀術だ。

しかし私の風斬りは精密さは形になってきたがまだ遅い。

しかも威力もまだ低いのだろうか。

吹き飛ばしたと思っていた足元の周りの雪は少し残っている。

フローラは全ての雪を吹き飛ばしていた。

私はふと自分の手を見て思う。

――「……まだ私は弱い。もっと強くならないと……」
四年前の、北の戦乱の時の後悔はもうしたくない。

だから私はずっと鍛錬を続けている。

皆もその理由でそれぞれ鍛錬を続けているだろう。

「……強く、ならないと……」

そう呟き再び風斬りをやり続けた。

……約1時間後

「ハア……ハア……」

既に風斬りをやり続けた数は三桁はいつているだろう。

と言ってもまだ完成していない。

ずっと剣を振り続け流石に疲れてきた。

周りを見てみれば木の至るところに無数の斬り傷がついていた。

「……そろそろ戻るか」

私はそう言って洞窟へ戻った。

暗い洞窟の奥で白い妙な服を着た男がいた。

まるで死んでいるのかと疑うほど、男は静かに眠っていた。

その男、ウルキオラは今空想の海に沈んでいた。

……ウルキオラSide

――ここは……虚夜宮【ラス・ノーチェス】の上……

気付いてみればそこは自分が黒崎一護と戦った決戦の場だった。

『殺せ』

いきなり自分の声が聞こえゆっくりと声が聞こえた方へ振り返る
そこには…

『…』

——…黒崎、一護……

もう既に死にかけている自分と、苦渋の表情を浮かべる黒崎一護がいた。

——ここは…あの時の……

『早くしろ…俺はもう歩く力も残ってはいない……。今斬らなければ勝負は永遠につかなくなるぞ。』

これは過去に起こったこと、現実ではない。
つまりこれは…

——…これは夢？この俺が……？夢など見たことがないから分らないな。——

自分は夢など見たことがないのだ。

何故？ふと思う。

そう思っているうちに話しが進んでゆく。

『…断る』

するといきなり、周りの空間がまるでガラスが割れたように上から崩れてきた。崩れた所は真っ黒な空間となっている。

だが俺はその時、思考の渦に呑み込まれていて特に気にしなかった。

『…何だと？』

——そうだ、何故？…お前は俺を倒したかったのだろう？

徐々に崩れて、俺たちまで後十数メートルまで迫ってきてる。

『…イヤだって言ってたんだ……！』

——な、ぜ……？——
『……』

遂に黒崎一護と夢の自分の所まで崩れてきた。

黒崎一護は夢の自分に向かって叫んだ。

『・・・こんな・・・。こんな勝ち方があるのかよ!!』

そして全てが崩れ去り自分と真っ暗闇な空間だけが残った。

———『こんな勝ち方があるのかよ!!』——

あの崩れ去る直前の、黒崎一護の言葉が自分の中で響く。

「本当に・・・最後まで思い通りにならん奴だ・・・」

すると突然、自分が足元から消えるようになってきた。

それに比例して意識が遠のいてゆく。

——…俺は、後悔しているのか…?俺は…何故、こんな…夢を…—

そして俺は夢の中で消えた。

・・・・・・

スウ…

目を覚ましてみると今度は雪ではなく、ゴツゴツとした岩肌だった。

EPISODE 4

・・・ウルキオラSide

暗い・・・暗い岩肌が見える。

ここは…洞窟か？

「俺は・・・いったい」

俺は少しも動揺せず、すぐさま今までの事を思いだそうとする。

――死んだ筈の俺は、目を覚ましてみれば知らない地にいて・

――

起きはじめた頭でうまく回らないが、それでも今までの事を思い出す。

――よくわからん屑共くずを殺した後、今度は女の戦士たちに出く

わして・・・！！――

徐々に頭も覚めてゆく。

――そうか…俺は気を失ったのか…。だとしたら俺は何故こんな所にいる？誰かに連れてこられたのか？――

疑問が湧きつつも立とうとする。

しかし…

「！？…クッ！う…？」

起きられない。

というより全く動けない。

まるでもの凄く重いものが五体に付けられているかのように動けない。

――なん、だ…これは…？――

「うっ…！っ！」

なんとかうつ伏せになり四つん這いをする形になる。

――無様…だ、な…クッ！――

あまりにも無様だ。

十刃【エスパード】であるこの俺が…地面に平伏す無様な姿になる

うとは…。

今の自分を蹴り飛ばしたいほど自分の“誇り”がそれを許さない。
だが今は立つことすらままならない。

——何故だ…？怪我をしているところもない。…確かあの時虚閃【
ゼロ】を撃とうとして…。

苦しみながらも体がこうなった理由を考える。

——この体が…俺の靈力に耐えられなかったのか…？
— そうだとしたら…虚閃を撃つ度にくる疲労感も説明がつく…

俺はあり得る仮定をつけるがそんなことをしても何も解決しない。

「う…。」

なんとか力を絞り出口であろう方向へ向かう。

既に体は悲鳴を上げていた。

頭を上げられなくてもただひたすら進んだ。

そして緩やかな角を曲がったところで暗かった洞窟が明るくなった
ことに気付いた。

「っ…。」

何とかして顔を上げようとした。

しかし…。

『『『『『なっ！？』『』『』『』』』』』

前方から幾つかそんな声が聞こえた。

その瞬間に自分はいくつもの剣と共に地面に抑えられていた。

「ぐあ…！？」

——クソッ…この俺が気づかないとは…

・・・クレアSide

鍛錬を終えた後洞窟で体を休めていると、妙な感覚に捕らわれた。

「・・・??」

「――何だ今は・・・? 一瞬”何か”が揺らいだような気がする・・・」

ふとあの男がいる洞窟の奥に顔を向ける。

「・・・」

「――もしかして・・・」

「?・・・どうしたクレア?」

私の不可解そうな表情に気づきミリアが尋ねる。

「いや、私の勘違いだと思うのだが・・・」

そう言うのと皆が不思議そうな顔をする。

『『『『『?』』』』』』

私はス・・・、と立ち上がり洞窟の奥へ行こうとする。
だが・・・

「っ?」

なんと、洞窟の奥からあの男がうつ伏せの状態で出て来た。

「!!?」

『『『『『な!?』』』』』』

全員が驚愕の声を上げる。

しかし驚愕しながらも私たちの行動は速かった。

ザッ!

すぐさま剣をとり、全員で男を取り押さえた。

もちろん変な行動をしようとしたら首を跳ねれるように押さえつける。

「ぐあ・・・!?」

男は押さえつけられているだけで相当苦しそうだった。

全員がかなりの力で押さえつけているのだから当然だ。

男はゆったりと頭を動かし、背中を押さえつけているミリアを睨みつける。

「…チッ…俺としたことが…こんなミスを犯すとはな…」

男は静かに舌打ちをし、そう呟いた。

——よくこの状況下で冷静に話せるな……

よほど冷静沈着なのか……

はたまた既に諦めているのだろうか。

どちらにせよ話を進めやすいかもな。

するとミリアが代表して男に質問した。

「貴様はいったい何者だ？ 人間ではないのだろ」

「……」

男はミリアを睨みつけたままじっとしていた。

だがやがて口を開く。

「……俺を……押さえつけたところで意味がないぞ……今

の俺ではもはやまともに体を動かすこともできん……」

————……だからうつ伏せの状態で出て来たのか？——

頭の中をそんな考えがよぎったが、ミリアは信じず反論する。

「そんな事を信じるとも？ 生憎危険な存在と知っててどく気はない」

ミリアが言うことは尤もだ。

油断するわけにもいかない。

「……それよりも答えろ。貴様は何だ？ 胸元の数字からしてどこ

かの組織だろう？ それも含め全て答えろ。でなければ……」

カチャ……と首に剣をつきつけ脅す。

ミリアの剣幕な表情からするとかなり本気だろう。

『胸元の数字』と聞いた瞬間、知られたくなかったのか男は確かに

驚いた顔をした。

すると男は仕方ない感じで静かに喋りだした。

「……第4十刃【クワトロ・エスパード】、ウルキオラ・シファー……

破面【アランカル】だ。……これでいいか？」

私は聞いたこともない単語に混乱した。

ウルキオラ・シファーというのは名前だろう。

だが……

——アランカル？クワトロ・エスパード？何だそれは？…聞いたこともない…

他の者は不可解そうな表情だった。

「アランカル？エスパード？…てめえ訳わかんねーこと言ってんじやねーぞ！」

知らない言葉に対しヘレンが怒鳴った。

ヘレンが怒鳴りたい気持ちは分かる。

だがウルキオラという男は変わらぬ冷静な顔で再び喋りだした。

「お前らの質問に応えたただけだが？…それよりも、ここは何処だ？」

男は本当にここが何処かすら分からないように尋ねてきた。

するとデネブが逆に聞き返した。

「貴様…自分の状況が分かっているのか…？」

デネブはミリアと同じぐらいの剣幕だ。

だが私はそれを無視し、男の質問に応えた。

「ここは北の地、アルフォンスだ…」

「クレア！」

ミリアが驚愕した表情でこちらを見て私の名を呼んだ。

男も反応しこちらに顔を向ける。

「貴様は…あの時の…」

しかし私はそれさえも無視し、違う質問をした。

「何故この地にいた？」

男は少しの間も置かずすぐさま応えた。

「知らん。気がついたらこの地にいた。…そこであの化物と貴様に会ったのがな…」

——化物…覚醒者の事を知らないのか？だとすると妖魔の事も知らないのか？…妖魔すら知らない者などいないはず…
チラッとミリアと目を合わせる。

『『…』』

どうやらミリアも同じことを考えていたようだ。

ミリアは確認をするために男に質問する。

「妖魔、クレイモア、北の戦乱……。この中で聞いたことがあるものは？」

パキッ：と焚き火の方からそんな音が聞こえ、この空間に沈黙が確かに流れた。

ウルキオラがクレア達に押さえつけられてから、30分近くたっていた。

正直よくずっとこの体勢が保てるな……と感心するほど。

ウルキオラは余り顔には出していないが、やはりキツそうだ。

しかし当の本人たちの周りには緊張感が漂っていた。

——北の地、アルフォンス……。——

ウルキオラはクレアが応えたことについて考えていた。

——そんな所聞いたこともない……。他に情報がなければ……

——

とりあえずもつと情報が欲しい。

すると案外楽に新しい情報を手に入れることが出来た。

しかしこの新しい情報によってウルキオラは分らないことが増えてしまった。

「妖魔、クレイモア、北の戦乱……。この中で聞いたことがあるものは？」

ウルキオラを上から押さえつけているミリアが尋ねた。

「?？」

——妖魔？クレイモア？……。北の戦乱？——

初めて聞く単語にウルキオラはあ然としてしまう。

そしてふと、ウルキオラこんな事を考えた。

ここは……。俺がいた現世ではなく、違う現世ではないかと……。

——もしや……。異世界……。?……。そんな事あり得るのか

？・・・だがもし本当にそうなら、今までの事も説明がつく・・・
――

「オイ、聞いているのかよ!？」

質問に対し応えないウルキオラに、ヘレンが再び怒鳴りつけた。

ノイトラみたく突っかかってくるヤツだとウルキオラ思いながらも、質問に応える。

「・・・知らん。聞いたこともない。だがお前質問で確証を手に入
れることが出来た:。」ウルキオラがそう応えると、全員の頭の上
に『?』が浮かんだような表情になった。

だがミリアだけが驚いたような表情になっている。

――こいつはもしかして:――

ミリアの頭の中で急速に思考が回る。

そしてミリアは尋ねた。

「お前:違う大陸の者なのか:？」

するとウルキオラは少し黙り込んだ後、ミリアの質問に肯定した。

「ああ、そうだ:」

この肯定に他の者達が驚いた顔になる。

クレアだけが無表情な顔だったが。

しかしウルキオラの中では新たに疑問がわいたのだった。

――違う大陸?:違う世界ではなく::?――

ウルキオラはこのままではまともに話せないと思い、ミリア達に提
案した。

「このまま話しても埒があかんだろう。拘束をといたらどうだ?」

「!」

いきなりの提案に沈黙が流れる。

するとミリアは皆に指示をだした。

「みんな、この男の拘束をといいい:」

ミリアがそう言うと、皆は仕方がないといった感じでウルキオラの
拘束をとく。

だがミリアは最後ウルキオラに警告した。

「少しでも妙な真似をしてみろ……。直ぐにでも首をはねてやる……」
そう言ってウルキオラの拘束をといた。

「く……う……」

ウルキオラは近くの壁に寄りかかりながら立ち上がる。

ミリア達はウルキオラが何かしようとするれば直ぐに対応できるように、戦闘体勢のままウルキオラを凝視した。

狭い空間に緊張が走る。

しかしウルキオラは苦しそうだが至って冷静だ。

「事情を説明してもらおうか」

ミリアは剣先を向け、ウルキオラに尋ねる。

ウルキオラははそれをジッと見つめ、やがて応えた。

「俺は……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4342h/>

クレイモアと虚無を抱く仮面

2010年10月11日16時00分発行